

## 山に親しみ山に想う (27)

—古書・奥多摩の「山村旅情」—

<文・写真> 岡本

JR 武蔵小金井駅北口から約3分、小金井街道から東へ横道を入ったところに、古書店がある。小平市に引越してきて直ぐにその存在に気づき、いつか覗いてみようかと思いつながら、何故か立ち寄ることがなかった。

新型コロナウイルスの蔓延で山歩きにも行けず家で鬱屈しているのなら、この際、読書に打ち込もうかと思った。近年、新刊書も高くなったし、これこそ読みたいという新刊書がある訳でもない。公立図書館はコロナで閉館中である。古書店なら安いし、若い頃読み逃した本があるかもしれないと思いつき、その古書店に先日初めて立ち寄った。

中央書房という古書店の間口は狭く、奥行きも短く、六畳程の広さしかないように見える。店の奥には、布袋様のような好々爺の店主が控えている。視線があっても頬の辺りをピクッと痙攣させるだけで「いらっしゃい」とも言わないが、八百屋のおじさんのように応じられても面食らう。古書は店の左右の壁の棚と店を二つに間仕切る両面の棚の、四面の棚に隙間なく詰め込んである。通路が狭いので、棚上段の古書を見るには首筋を痛いほどに曲げ、棚下段を見るには蹲踞の姿勢で首を横向きにしなければよく見えない。背後を通る人とは気になる濃密接触状態になる始末である。貧相な店構えの割には、棚の古書はよく揃えられている。主題ごとに分類されており、文庫判、新書判、全集、高価な箱入りの古書もあって店主の熱の入れ方が伝わってくる。狭い通路にまだ紐を解いてない古書の束が来店者の不便も気にせず無造作に置いてある。山関係の古書も意外に充実している。串田孫一の署名入りの古書が本棚最上段に何冊も並んでいるし、有名登山家の著書もほぼ並んでいた。

文庫判、新書判の古いところを何冊か求めようと立ち寄ったのだが、いつの間にか山の古書を選ぶのに夢中になっていた。結局、五冊の山関連の古書を含めて八冊を手に入れた。新刊書なら複数冊並べてあって、購入した嬉しさも普通だろうが、古書店での購入は、一味違うようだ。もし誰かが先に購入していたら二冊と置かれてない古書だから入手できなかったらうに、幸運にも巡り会えた末に手に入れたという満足感がある。

購入した古書は次の八冊

「山村旅情」 依田秋園著 朋文堂 昭和16年発行 壹圓六拾銭 購入価格 750円

「単独行」 加藤文太郎著 朋文堂コマクサ叢書 昭和33年発行 280円

購入価格 1300円

「ヒマラヤ登攀史」 深田久弥著 岩波新書 1969年発行 150円 購入価格 50円

「多摩の百年上下」 朝日新聞東京本社社会部著 1976年発行 各920円

購入価格 1000円

「山里の釣りから」 内山節著 岩波同時代ライブラリー 1995年発行 1100円

購入価格 100円

他の三冊は、「歴史とは何か」E.H.カー、「ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界」会田雄次、「はじめての植物学」大場秀章である。

単独行はヤマケイ文庫で読んだが同郷の誼みで、ヒマラヤ登攀史は未読のため、多摩の百年は奥多摩山域との関連で購入した。山村旅情は山村集落、里山の情趣を描写しており、低山嗜好にピッタリだからで、真っ先にこの本から読んだ。



「山村旅情」の著者依田秋圃は明治から昭和の歌人である。東京帝大林学科を終えて林務官として名古屋、東京で勤務しており、東京深川の産である。職業柄を生かして本書の他に「山と人とを想いて」「山にて聞いた話」「山村の人々」などを著している。これらの書名から推測されるのだが、秋圃は山と共に生きる人々の生活を歌人の心で描くことが好きだったのでは

ないだろうか。

本書は形式的に短編小説風のものや、寸描風、寸評風があり、題材的には山村に住む人々の生活振りや山々の動植物、山火事や営林など諸々を描きだしている。それらの中で、私にも馴染みのある奥多摩を扱った「濡れて歩く—武州奥多摩峡谷記—」（昭和四年五月記）を身近なものとして読み込んでみた。秋圃が奥多摩を歩いた昭和四年頃は、昭和二年頃から始まり昭和七、八年まで続いた恐慌の最中である。日本を席捲した恐慌による糸繭価の暴落で養蚕地帯の三多摩の農村が酷い打撃を受けていた。また、昭和六年に東京市が東京水道の貯水池計画（小河内ダム）を発表した頃である。

秋圃は、昭和四年五月の某日奥多摩氷川の宿で「月が冴え冴えと急峻な峰の上に、まだ盡きぬ冬の光を以て氷川部落の人家を幽邃（ゆうすい）にてらしていた。」のを眺めながら、明日からの旅程を考えていた。そして、「明朝氷川の宿を立て更にも多摩川に沿って上流に向ひ、小河内の鶴の湯温泉といふ所に行かう…何処でも好いからもう一泊して後、二俣尾驛の方へ引き返へさうと心に決め」ており、「氷川から三里の道を一人あるくことの嬉しさ」を思い描いている。氷川村と小河内村の鶴の湯温泉までは三里の十二料程で一日の歩行として適当な距離だが、温泉に入った翌日の帰路では二俣尾駅まで戻ることにしており、相当の距離になる。氷川から鳩の巣、古里、御岳、軍畑、二俣尾までは地図上で概算した直線距離は十一料だが、実際に青梅街道を練り歩くとすると十五料は超えるであろう。二十七料から三十料は道の悪い当時としては大変な距離なのだが、秋圃はどう考えていたのか気になる。何かあるのではと調べた。小河内辺りから氷川経由で鳩の巣まで四里歩くと、当時既に鳩の巣から二俣尾まで、奥多摩自動車（注1）の路線バスが運行していたことがわかった。二俣尾駅からは青梅鉄道（注2）で立川まで行き、立川駅からは国有化されて中央線と名称を替えた甲武鉄道（注3）に乗り換えると新宿に戻れるということを知り得た。

秋圃は、鶴の湯温泉のある小河内を目指して氷川の宿を出立しながら、鶴の湯温泉には期待しておらないと、こうも言っている。「もとより温泉の在るなしは私の旅興をさまで司配するものではなかった。山谷があり森林があり溪流に向ひ時々人家を側見し得る道路

ならば、それを踏んで行きたいと云ふ唯夫れのみ願ひなのである。」と山村、里山を歩くだけ、言い換えれば、青梅街道を往復するだけで満足だと言っている。だからなのか、登山の旅装はしておらず、「永い間山中の旅行をし慣れているが……一夜泊まりの旅だから……傘は持たず、つい近所へ郵便を入れにゆくときの形で家を出たのだ。」と言う。青梅街道に行く場合でも、平坦地ばかりではなく昭和初期では現在より厳しかったはずだ。急峻な山腹の溪谷沿いを歩き、幽谷にへばり付く、石垣、竹藪、蔵を揃えた大きな屋根の家や「峡間に窺はれる下流の山々をほしいままに嘆賞」している。



昭和10年ころの鶴屋旅館  
(今は奥多摩湖底)

青梅街道を小河内方向にどこまで来てからのことなのか書いていないが、「小河内に向けていた足を返へして、私は再び氷川の村へはいつた。」と素っ気なく書いている。その理由として、急に突風が吹き出し砂塵を浴びることになったからと言い、「私は山道を歩きさへすればそれで満悦する。……足を翻して氷川の方に返したのは唯そのためである。」と釈明するようにも書いている。

秋園は温泉には拘泥せず踵を返したが、自分は鶴の湯温泉が気になるので深掘りする。吉備人出版地図では、倉戸山山麓の女の湯バス停近くに「鶴の湯温泉源泉」がある。小河内ダムが建設されて小河内村が湖底に水没するまで村に武田信玄が隠し湯とした湯治場があった。帝都東京の水を確保する東京市の強い要請を受け、昭和六年小河内村民は先祖からの墳墓の地を断腸の思いで立ち去ることを決断した(最初、候補地として古里村に要請したが拒否された)。しかし、補償問題や戦争勃発など種々の経緯があって、小河内ダムが完成したのは二十六年後の昭和三十二年である。その前の昭和二十五年に従来の小河内村は解村した。秋園が昭和四年に鶴の湯温泉に行こうとして止めた頃には、丹波川、小菅川の水流を集めた多摩川が小河内村を緩やかに貫流しており、村には約三千五百人、五百四十二戸の家があった。工事着手前の昭和十年頃には小河内村の鶴の湯温泉には鶴屋旅館はじめ八軒の鄙びた温泉宿があったというから、四年頃にはもっと賑わっていたのではないか。鶴の湯温泉は一旦湖底に水没したが、源泉を汲み上げるポンプを設置したため完全な消滅は免れ、平成三年にポンプを補修整備して汲み上げ、タンクローリーで旅館、民泊に配湯することで温泉は蘇った。小河内神社近くの馬頭館に寄って「幻の温泉」に浸かりながら、村を離れた村民たちの心情に思いを寄せてみるのはどうだろう。完成間際まで村に残って水没を見た人は言う。「最後の時を、生ある限り忘れないだろう。庭まで水が迫ってきて家を壊しました。老いた父は、この水が我々を攻め滅ぼした、とでもいうようにしばらく気が変でした。」

昭和初期頃の奥多摩に触れるならば、氷川村、小河内村、古里村の三村(現在の奥多摩町(注4))の娘たちも八王子の機屋や製糸工場に生糸工女として出ていたことに、唯の一言なりとも触れないわけにはいかない。工女の労働環境は厳しくこんな機織歌が伝えられている。

「これから始めて一丈と五尺 織れなきや旦那の眼が光る、  
機が織れない機神さまよ どうぞこの手のあがるよに、  
日にち毎日こうこと茶漬け たまにやさカナも毒じゃない、  
機織バツタの行末ごらん おさづか(箆柄)枕にのたれ死に」

踵を返して氷川村まで戻ると秋圃は、昨夜の夕食で生まれて初めて口にした「河のり」(注5)の味を思い出している。「美しい鮮緑のやや厚い手觸の其の「のり」には全く味といふものが無かった。」としながらも、「清冽な溪流に産する河のりの無味無香が堪らなく愛(かな)しく思えた。」「激流に断えず揉まれ洗はれて、つやつやしく薄くしかも剛く、盤根岩角(いはねいはかど)に生えている水苔。味もなく香もないのは畢竟清冽なる水其のものの味ひであり香りである。」と歌人の繊細な味感覚を吐露している。「河のりを家づとにしようと、氷川の村の店を二三軒尋ねて見た」ようだが、その季節でないため品切れであった。実は自分も食したことがないので、一度味わってみたいが、今では絶滅危惧種となってしまうとすれば不可能かもしれない。



奥多摩湖

秋圃は鳩の巣、古里辺りでだろうか、こんなことにも気付いている。「白ペンキ塗りの指導板を勿體らしく道傍に立てて名稱を付けてある景色は、大抵の場合、さまで有りがたいものでなく、多くは月並みな俗悪なもの……まことに困った流行である。……環境の整調を汚濁する如き方法は厳に戒めねばならぬ。私は峡谷に沿ひて歩きながら、少し議論張った斯様のことを考へて居た。」と、いつの時代にもありそうな俗化の兆しに気を揉んでいる。この直後に雨が本降りになった。古里村の街道沿いの雑貨屋で傘がわりに江戸時代からある桐油(桐油紙の雨ガッパ)を見つけているが、別の店まで行きから傘を買っている。



旧青梅街道鳩ノ巣あたりの坂下集落

「から傘にふる雨の音は、いよいよ強くなってきた。……暖かいふくらみのある音である。まさしく春のおとである。」と、パラパラというから傘の音に春を感じとっている。「私はすっかり満足した。春雨はから傘に賑わしい調律を立てて、それが多摩川の水聲と遙かに交響している。傘を打つ音は耳のすぐ側でこまやかに断続して遠方の静かな響と合奏しているのである。その佳い音響に楽しみながら、私の眼は春の氣配の迫り寄つた山景を眺めているのである。私の満足はそれを現はすに適當な辭句もないほどである。」と、山景を眺めつつ、春雨と溪流との交響の余情に浸りきっているところで、奥多摩峡谷記を終えている。

秋圃は鳩の巢から青梅鐵道の二俣尾駅まで乗合バスで行けるのに、少なくとも古里まで歩き、さらに、川井、御嶽辺りまで歩いて「春雨じゃ 喜ばしい也 傘の音」を楽しんだのだろう。唯歩くだけで自然を取りこみ満足できる歌人の感性を羨ましく思う。

(おわり)

(注1) 奥多摩自動車は1922年(大正11年)に当時青梅鐵道の終点二俣尾駅と鳩の巢の間をバス運行していた。この地域最初の路線バスである。

(注2) 青梅鐵道は1894年(明治27年)に立川—青梅間、1898年(明治31年)に青梅—日向和田間、1920年(大正9年)日向和田—二俣尾間を開通した。

1929年(昭和4年)9月1日に二俣尾—御嶽間、1944年((昭和19)御嶽—氷川(後、奥多摩駅)間を開通、全線開通と同時に国有化され青梅線に改称した。

(注3) 甲武鐵道は1889年(明治22年)4月新宿—立川間、同年8月立川—八王子間開通、1906年(明治39年)国有化されて、中央線に改称した。

(注4) 奥多摩町は1955年(昭和30年)に氷川町、古里村、小河内村が合併して発足した。

(注5) カワノリ(学名 *Praslola japonica* Yatabe) は溪流に生育している淡水産の藻類、夏から秋にかけ採集され「川海苔」として食用に供される。絶滅危惧種に指定。

#### 参考資料

「奥多摩、奥武蔵日帰り山歩き」実業之日本

「多摩の百年 上下」朝日新聞社

「やさしい 多摩市町村の歴史 青梅市、奥多摩町、檜原村、五日市町、八王子市」

武蔵野郷土史刊行会

「ウイキペディア」